者の研究がより円滑に進むよう企画されたものである。第三回（6 月 22 日開催）では、東海社会学会大会のプレ報告会を行った。こちらは半ば恒例となった企画である。

第四回（11 月 24 日開催）では、博士論文構想検討会を行った。博士論文を書く予定の院生が定期的に報告することで、互いの進捗を「監視」しあうのである。この回では研究報告に加え、ゲスト講師として博士論文を提出された先輩をお招きし、執筆のスケジュールや執筆期間の生活などについてお話を伺った。筆者自身にとってもたいへん有意義なアドバイスを頂くことができ、感謝申し上げる。なお、以前より名古屋大学教育発達科学研究科教育社会学の大学院生にも参加していただいている。互いにとって普段とは異なる知的刺激が得られる機会となっている。

こうしてみると、文献の輪読を同時並行で行うはずだったが、結果的に今年度の不老会は研究報告が中心となってしまった。社会学の新しい研究動向を知り、古典・新古典を読み返すことは当然重要であるが、昨今大学院生が置かれた状況をふまえると、本研究会の互助組織としての重要性が増してきたといえよう。今後は、『再配分か承認か』（ナンシー・フレイザー＆アクセル・ホネット著、2004=2012）の読書会と、次年度の学術振興会特別研究員申請者による報告などを予定している。

Ⅳ　博士論文をふりかえって

博士号取得までを振り返って

椙山女学園大学文化情報学部講師
木田勇輔

2014 年 12 月に博士号を取得し、2015 年 4 月より椙山女学園大学文化情報学部に講師として勤務している。社会学分野で専任教員のポストを得ることは昨今容易ではなく、そのような中で私が職を得ることができたのは、率直に言って幸運だったからとしか言いようがない。もちろん、学部 4 年時からご指導をいただいている黒田由彦先生をはじめ、これまで多くの方々から様々な形で支えていただいたということも忘れてはならないだろう。今回は私の体験が多少なりとも博士後期課程に在学する大学院生諸氏の参考になればという思いから、筆を取ることにした。

最初に私と社会学の出会いについて。私は 2003 年に名古屋大学情報文化学部社会システム情報学科に入学したのだが、大学入学時には漠然と情報化社会のあり方に関心を持っていたのだと思う。学部 2 年次に板倉達文先生の講義を受け、社会学という学問の存在を知って大きな魅力を感じたため、3 年次に社会学と地理学で構成される社会地域環境系に進学

した。そして、社会学だけでなく地理学の教育も受けるうちに、都市や地域社会に強い関心を持つようになった。卒業論文は地域社会への大規模商業施設の進出プロセスを分析するものであった。振り返ってみると、私の学問的な問題意識は学部時代に形成されており、現在でもあまり変わっていないように思われる。そういう意味では、研究者としての私は名古屋大学情報文化学部という知的土壌の産物なのであろう。偶然にも現在は情報系・学際系の学部に勤務しているが、これも何かの巡り合わせなのかもしれない（なお、かつて情報文化学部で学んだことは、現在の勤務先での教育にあたって大変役立っている）。

2007 年に大学院博士前期課程に進学したのだが、都市政治論という専攻が固まったのはこのときである。修士論文のテーマを考える中で、指導教員である黒田先生から政治社会学的なアプローチからの都市・地域研究についてアドバイスをいただいたのである。もともと政治に関心があったこともあり、ハンターとダールの研究から始まる都市政治論は私の問題関心にぴったりと適合するものであった。そして、都市政治論の代表的な分析枠組みである都市レジーム論を用いて、岐阜県可児市の国際化政策を中心に分析を行い、修士論文として提出した。

このような中で 2009 年に博士後期課程に進学する。この年の 4 月に名古屋市では河村市政が誕生し、私も名古屋市政の調査研究を開始している。実はこの段階では名古屋市はいくつかの事例の一つというくらいに捉えており、それほど本格的に研究するつもりはなかった。しかし、いつの間にか名古屋市政研究に没頭していくことになり、そのうちに名古屋市政の専門家のようになってしまったというのが正直なところである。これもまた一つのめぐり合わせであろうか。

おそらく多くの人がそうであるように、私にも博士後期課程の前半にはなかなか研究が軌道に乗らなかった時期もあった。とくに最初の数年間は学会誌の査読に耐える論文が安定して書けないことに苦労した。しかし、学会誌に掲載された論文を読み、自分の論文に足りないところを考え、繰り返し投稿することで査読というハードルも次第にクリアできるようになった。Publish or Perish（出版せよ、さもなくば消えよ）という有名かつ刺激的な言葉があるが、とにもかくにも書かなければ始まらない。とくに昨今は若手の業績がインフレ傾向にある中で、論文を「量産」することがますます求められている（これがよいことかどうかは別として）。そのような中で、私は学会誌に「書くこと」、そしてそれを査読という仕組みで「評価されること」によって不十分ながらも少しずつ研究者としての自分を高めていった。

2011 年に日本学術振興会特別研究員 DC2 に採用され、よりスケールの大きな研究ができるようになった。とくに 2011 年に名古屋市の有権者に対して質問紙調査を実施できたことは、私の研究にとって大きな進展であった。このデータ分析を通じて名古屋市民が市政についてどのように捉えているのか、少しずつ明らかになっていった。また、このデータの分析を通じて定量的研究の手法にも習熟できたことは、私のその後の研究の展開にとって大きくプラスになった。貴重な時間を割いて調査にご協力いただいた市民の皆様には、い

くら感謝しても足りないほどである。

ただし、博士後期課程の後半に入って出版した論文の数々を博士論文にまとめていく際には、かなり苦労したというのが正直なところである。私の場合、博士論文審査セミナーに二度落第しており、さらに合格後も原稿の全面的な書き直しを二度行った。また、2012年9月に博士後期課程を満期退学し、さらに2013年3月に学振研究員の採用期限が切れたため、非常勤講師業で生活をしていく必要があった。2013年からの2年間は、非常勤講師で日々の糧を得つつ、いつ終わるかも分からない博士論文を修正し続ける毎日であった。このような生活もあと一、二年と続かないだろうから、そろそろ別の道も考えなければならないとも考えていた。だが、2014年後半に現在の勤務校への着任と博士号の取得が立て続けに決まり、このような心配は杞憂に終わることになった。本年 4 月からは忙しくも充実した日々を過ごしている。しかし、これも私の一人の力というよりは様々な人々の支えによるところが大きい。

もし自分自身の反省もこめて私から後輩の院生諸氏にアドバイスをするとしたら、以下のようなことが挙げられるかもしれない。①学会誌の査読付き論文を一本でも多く書くこと、②非常勤講師として積極的に教育経験を積むこと、③博士号を可能な限り早期に取得すること、④計量分析の手法はできれば使えるようになっておくこと、⑤チャンスがあれば英語の研究業績も作っておくこと。私自身の体験にもとづく感覚に過ぎないのだが、上記の①～⑤がこの世界での「生き残り確率」を高めていく上でじわりじわりと後から効いてくるように感じている。ただし、博士後期課程の院生が独力でこれらのことが達成できるとはなかなか思えないので、講座全体の体制として（また、私たち修了生も含めて）より積極的にバックアップしていくことは必要ではないかと思う。最後に、私はお世辞にもよい手本とは言えないのであまり参考にならなかったかもしれないが、博士後期課程の院生の方々に私の拙い文章が何かしらの形でお役に立てれば幸いである。

博士論文をふりかえって

国立民族学博物館外来研究員／名古屋大学大学院研究員
前島訓子

私は、博士論文「遺跡から『聖地』へ：インド・ブッダガヤにおける『聖地』再建のダイナミクス」を提出し、2015年3月に博士号（社会学）を取得しました。

私がインド・ブッダガヤを研究しようと心に決めたのは大学生の頃です（その当時、自分が博士論文を書くとは想像もしていなかったことですが）。ブッダガヤは、仏教最大の聖地として日本でも知られた地です。2001年に初めてブッダガヤを訪れてから、同地域の歴史的遺跡が2002年に世界遺産に登録され、その後、訪れる世界各国、地域の仏教徒や観光